

三河雅弘報告と福島克彦報告によせて

藤田裕嗣

筆者がコメントの任に当たった《古代・中世》で最初の報告は、三河雅弘「古代日本における田図および荘園図の機能と表現内容」(報告時の原題)であった。本誌に寄せられた原稿では、「班田図と古代荘園図の役割—8世紀中頃の古代国家による土地把握との関わりを中心に—」と改題されている。副題で示された観点を重視して、さらに敷衍された一方で、主題では「田図」、「班田図」/「荘園図」、「古代荘園図」と四つの用字が入り乱れる結果となった。原題のうち、まず「田図」の用字は、今日に残されている「開田図」や史料にのみ見える「校田図」などと紛れる危険性を避けるため、「班田図」に統一されたのであろうと拝察する。この拝察が当たっているかはともかく、歴史地理学が注目する、現物としての地図を位置づけるにも、古代・中世を議論する場合は、史料にのみ見え、現存しない「図」に関する考察も実は不可欠なのである。さらに、「荘園図」の前に敢えて古代を付け、「古代荘園図」の用字を採用されたのは、中世の「荘園絵図」との違いを際立たせるためであろう。筆者なりに追加説明すると、中世の「荘園絵図」の用字は、我々が地図と呼ぶような表現形態は、古代では単に「図」と称されていたのだが、12世紀頃から「絵図」の用字が見え、近世まで続く流れが踏まえられているのである。

この説明にも現われている歴史地理学の難しさについて、三河論文をコメントする当面の課題との関係からも、論及しておく。そもそも地理学としての研究手法が有効に使える

のは、①地理的実態と②地形を含む地理的条件による地域毎の差異(地域差)に関する考察であろうが、それを発揮させるためにも、その前提として、③時間軸における流れ(その一例が、上記の「図」から「絵図」への呼称の変化)に加えて、④研究の進展による理解の違い=研究史の文脈もある。その研究史は、三河氏が研究対象とした班田図や古代荘園図については、隣接する文献史学をも含むので、さらに複雑さを極める。三河氏は、この文献史学における議論も踏まえつつ、歴史地理学の観点に立って、新しい論点を提示しようとして試みている。本誌所収論文で「図2 図の方格線についてのこれまでの理解」と「図5 図の方格線と現地との関係」の二つの図は、上記のうち、④研究史の文脈に従って分けられたが、その理解の対象は、①の、地理的実態(土地区画)である(②と③の要素もあり)。敢えて対比的に一つの図で表現するのも、①の理解を促す上で有効であるとも思われる。

さらに、図7と「表1 古代荘園図の分類試案」では、研究対象とする絵図の分類を試みている。この分類で主な指標となったのは図の作成主体であり、それが表現内容(描かれた対象)や作成時の図の動きとも、連動する、という主張であると筆者は読み取った。歴史地理学が問題にしたいのは、絵図上での表現から読み取れる当時の土地利用そのものであろうが、それとの連動性が今ひとつ判然としないのは惜しまれる。この論点は今後の課題として、文献史学も含めた形で、さらな

る研究の進展を期待したい。

2つ目の報告、福島克彦「中世都市丹後府中と『天橋立図』」の原稿が、間に合わなかったのは残念である。雪舟「天橋立図」を取り上げた福島氏は、当時における「都市」景観の復原を試みた。中世都市は、文献史学・考古学に、建築史学も加わり、分野間の交流が盛んな研究テーマの一つである。氏の報告で地籍図からのアプローチも含まれていたように、その中で歴史地理学も一定の役割を果たしている。そして、グラフィックな史料として当日は、地籍図以外にも、「16世紀中葉～後期制作」とされ、「天橋立図」と同時に位置づけられる「成相寺参詣曼荼羅」にも言及された。この中で、地籍図は、近代に作成され、その描写対象は確かに近代なのである。丹後府中の景観復原に向けてアプローチする課題を深めるには、各々の史料を比較して、その特徴を踏まえつつ、さらなる史料批判も必要であろう。

歴史地理学を取り巻く隣接諸科学の一つとして美術史学を取り上げると、「天橋立図」は、好個の研究対象とされてきたのとは対照的に、三河氏が対象とした古代荘園図・中世の荘園絵図については、葛川絵図研究会に参画された美術史学研究者などによれば、「戯作」といったマイナス評価があり、研究対象

とするのに邪魔をしたようである。この事情は、先に言及した「成相寺参詣曼荼羅」についても指摘できると思われるが、美術史学の観点からは「戯作」であっても、我々地理学者にとって荘園絵図は、「地図」であり、研究に値したのであった。

かつて筆者が、歴史地理学の道を選んでまだ駆け出しの院生時代に、文献史学に進んだ友人から、歴史地理学は歴史学の下僕に過ぎない、と直接に言われても、有効な反論をできないでいた。その話題をシンポジウムのコメントで出すと、その後も多くの方が言及されたので、1980年代に歴史地理学徒は隣接諸科学との関係で多かれ少なかれ危機を感じていたのであろう。三河氏の絵図研究にせよ、福島氏の都市論にせよ、近年では専門分野を越えた議論が深まってきており、その一翼を歴史地理学も担ってきた。確かに、情勢は変わってきたと言えるであろう。

本シンポジウムでは、若手の研究者による報告が集まった。歴史地理学を取り巻く隣接諸科学との議論の高まりを踏まえ、新しい研究段階への入り口に我々は確かに立っており、さらに一步、前へと踏み出す契機に、本シンポジウムがなることを祈念して、拙いコメントを終えたい。

(神戸大学文学部)